

総合文化研究所ワークショップ 「核の記憶と想像力」開催報告

長谷川健司

2023年12月8日(金)午後5時40分より、本学の西岡あかね准教授の司会のもと、コメンテーターに越野剛氏(慶應義塾大学)を迎え、ワークショップ「核の記憶と想像力」を総合文化研究所で開催しました。発表者はいずれも本学の博士後期課程に所属している竹内航汰氏、梶彩子氏、筆者(長谷川)の三名で、それぞれフランス文学、ロシアバレエ史、冷戦期科学史という多彩なバックグラウンドを持つ若手研究者であり、「核」をめぐる分野横断的な対話を目指して集結しました。

まず、企画者でもある西岡氏から趣旨説明があり、原爆被害を語ることの難しさ——被曝(被爆)体験の表象不可能性や外部の人間が語ることの倫理的問題など——の指摘がありました。そうした難しさの反面には、ピンナップガールの容姿が「キノコ雲」と平行に描かれるような、軽薄で無神経・無責任な語りも多く存在します。その一方で、冷戦期においては身近な脅威であった「核」を語ることへの欲求、そして、「核」を語らなくてはならないという倫理的な要請が存在したこともまた見過ごしてはならないと西岡氏は言います。そこで今回のワークショップの各発表者は、戦後のフランス、旧ソ連、米国という、核攻撃の直接的被害を被ってはいない場所を研究フィールドとしていることもあり、体験していないけれども／体験していないからこそ表出した「外」からの眼差しの歴史的事例を報告するはこびとなりました。

竹内報告では、マルグリット・デュラスの『ヒロシマ・モナムール』や『かくも長き不在』をはじめとする作品における、第二次世界大戦の記憶と忘却の問題を取り上げました。竹内氏によると、デュラス作品において特異なのは、常に戦争表象が忘却という形で表出している点です。この点に関して、デュラスの作品そのものの分析だけではなく、彼女に向けられた当時の批評や批判に対する作家本人の応戦、そしてそれを昇華させた作品制作のプロセスの側面に着目することで見えてくる、デュラスの戦争表象・核表象における記憶と忘却のシステムについて竹内氏から報告がなされました。

梶報告では、旧ソ連やその近隣諸国で、キューバ危機に前後するように製作された、原爆の悲劇をテーマにしたバレエ作品を取り上げ、その中でもとりわけ、原爆犠牲者の身体そのものを取り上げた作品を作った振付家レオニード・ヤコプソンに着目しました。丸木位里・丸木俊の『原爆の囃子』からインスピレーションを得て創作されたという作品『ヒロシマ』は、犠牲者たちの恐怖や苦痛に満ち溢れた、ヤコプソン作品の中でも最も凄惨なバレエです。梶氏からは上演・受容の経緯や同時代の同テーマの作品と比較に、振付の分析を加えて報告がなされました。



長谷川報告では、核時代の幕開けとともに誕生した「放射性トレーサー」技術によってドラスティックに変革された科学的世界像について、冷戦期の生態学者たちの視点から分析しました。数百回に及んだ大気圏内核実験などによって引き起こされたグローバルな放射能汚染は、核時代の新たな光学として自然を照射し、生物の肉体に深く貫入し、生態系の破壊を通じることで可視性の水準を転位させました。長谷川報告では、生態学的な想像力が冷戦期特有の統治思想と絡まり合うことで、放射線によって映し出された核時代の地球像が、管理・計算可能な「閉鎖系」を基底的なアナロジーとして変質していく歴史的プロセスを素描しました。

最後に越野氏から全体に対するコメントとして、次の二点が提示されました。まず、長谷川報告のキーワードである「閉鎖系」にも関連して、近代以前には(特にキリスト教圏では)人間を取り巻く時空間がある種の「閉鎖系」と広くみなされてきたのが、近代に入り、進化し拡張し続ける時空間へと変質し、そして核時代には一転して「閉鎖系」としての世界という想像力がふたたび回帰してきた、という巨視的な歴史的視座が提示されました。第二に、本ワークショップのテーマである「記憶」に関して、越野氏は、言語を超えた記憶の可能性／不可能性というテーマが、報告者三名に共通するテーマだと指摘しました。「原爆」に対する距離感を捉えることが、作品や言説となって表出するもの(あるいは記憶)に向き合う際に求められるのではないかと越野氏は言います。

本ワークショップの開催はある意味で時宜を得たものとなりました。冷戦期は超大国として世界を二分したロシアの大統領が堂々と核戦力を誇示し、またイスラエルの某国務大臣はガザへの核攻撃を恥ずかしげもなく示唆する。そしてまた国内に目を向ければ、十分な議論と国民的なコンセンサスもなく放射能汚染水(公式的には「処理水」)が大洋へと放出されるという、まさに各方面で「核の記憶と想像力」が問い返されるタイミングでの開催となりました。

それゆえに各報告者は、冒頭で西岡氏が指摘したところの、「核」を語ることへの欲求、そして、語らなくてはならないという倫理的な要請に、自らの内在的な課題としても向き合いつつワークショップに臨みました。越野氏は「原爆」への距離感を捉えることの重要性を指摘しましたが、少なくとも、「核」という問題をめぐっては、もはや現代社会のどこにも外部は存在しないのかもしれませんが。今回のワークショップは、「核」の偏在性を浮き彫りにするとともに、人文学領域において記憶と想像力を主題にすることの現代性をあらためて認識する機会となりました。

ワークショップ「核の記憶と想像力」

日時：2023年12月8日(金) 17:40-20:00

場所：東京外国語大学総合文化研究所(講義棟422教室)、オンライン(Zoom)

発表者：竹内航汰、梶彩子、長谷川健司

総合文化研究所

ICS

Workshop

核の記憶と想像力

竹内航汰

忘却、それは真の記憶である：

マルグリット・デュラスにおける

戦争の歴史と忘却の問題

梶 彩子

ソ連バレエにおける原爆の記憶：

レオニード・ヤコプソン振付バレエ『ヒロシマ』を例に

長谷川健司

汚染の光学、影としての生物圏：

全球の被曝による可視性の転位と

冷戦期の生態学的想像力

12/8

コメンテーター 越野剛（慶應義塾大学）

Friday（金）

17:40-20:00

総合文化研究所

422 教室

同時配信あり（zoom）

ミーティング ID: 876 8855 3089

パスコード：086798



主催：総合文化研究所 一般公開・参加費不要・事前申し込み不要